

牧師室から (6.27)

明日から雨が降り続くという天気予報を気にしながら、今のうちにと洗濯物を洗濯機に入れた。洗剤を入れてスイッチを押すと、設定した通りに洗濯機がかしこく洗濯してくれる。今の洗濯機は洗い、すすぎ、脱水まで全自動になっているが、洗濯機が出たばかりの頃は、脱水のところが別に付いていて、すすぎまで終わると、手動で横のところに洗濯物を移して脱水を行っていた。結構昔話になるが、皆さんの中にはそのような洗濯機を使った覚えがある方もいるかも知れない。

そんな不便なものを使っていたなど、今は思うが、当時にはそのような洗濯機もとても不思議で喜ばしいものであった。毎日4人の子どもの洗濯物で苦勞をしていた母は、その洗濯機が入ってきたときにとっても嬉しそうな顔をしていた。私の子ども時代は、そのような洗濯機も普及されたばかりで、その洗濯機を持っていることに、母は誇らしい気持ちさえあるようであった。

洗濯が終わったという知らせ音がすると、「善姫、今私はここから手を離せないから、洗濯物を脱水のところに入れなさい」と長女である私はしばしば母から言われた。やってみると、水を含んだ洗濯物が結構重い、しぶしぶ何とか小分けして脱水のところに入れ移して蓋をしてスイッチを押す。当時の私には結構面倒な仕事の一つであった。

ある日、前の洗濯機を処分して全自動の洗濯機を買った時、喜ぶ母の横で、解放された気持ちで立っていた自分を覚えている。洗濯機だけではない、掃除機、冷蔵庫、テレビなど、日本でも「神器」とも言われたようであるが、それらが女性たちを家事の苦勞から解放してくれた、とてもありがたいものであるのは言うまでもないことであろう。今はそれだけではない、顔が見えるテレビ電話、声だけで操作できる電気機器など、もっと便利で不思議と言えるものは私たちの周囲に溢れている。これから人間が運転をしなくても自動でやってくれる車が出るという。

しかし、このようにますます便利になっていく世界の中で、私たちは本当に幸せであるのだろうか。コロナ禍の中、家にいる時間が長くなっている今であるからこそ、心を鎮めて、私たちの本当の幸せを、改めて主に問い求めつつ過ごしたい。

(鈴木善姫牧師)